

Title	ヨーハン・沃尔夫ガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』初稿(1821年) : 翻訳の試みと覚書(2)
Sub Title	J. W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre (I. Fassung). : Übersetzung und Anmerkungen (2)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.57 (2018.) ,p.29- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20181031-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』
初稿（1821年）
——翻訳の試みと覚書（2）——

山 本 賀 代

試訳¹⁾

第1章²⁾
エジプトへの逃避

ある大きな岩の陰にヴィルヘルムは座っていた。そこは険しい山道がひ

- 1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10 *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhanrd Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、本書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17 *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲は FA10, S. 19–42。脚注には、主として 2 稿との異同（明確な変更箇所はアンダーラインで示す）や、執筆・改作過程に関する情報を記した。ただし引用符の有無、コンマ・コロン等の記号の変動や正書法の修正・変更については省略した。以下、作品名は『遍歴時代』と略す。
- 2) ゲーテが執筆した最初の章。1807 年 5 月 17 日の日記には「朝 6 時 30 分、

とつの角をぐるりとめぐって急激に谷のほうに下りていく、ぞっとするような分岐点³⁾だった。太陽はまだ空高く、ヴィルヘルムの足もとの岩場に生える唐檜の梢を照らしていた。彼がちょうど石盤に何か書きとめたとき、あちこちとよじ登っていたフェーリクスがひとつの石を手に、彼のところにやって来た。「この石、なんていうの？　お父さん」少年は尋ねた。

「わからないな」とヴィルヘルムは答えた。

「このなかに光っているの、金じゃないかな？」少年は言った。

「まさか！」ヴィルヘルムが答えた、「思いだしたぞ、これは金雲母〔猫の金 Katzengold〕と呼ばれているものだ。」

「金雲母（猫の金）ですって」少年はそう言って微笑んだ、「どうしてなの？」

「これは偽物の金で、猫も偽物と思われているのだろう。」

「覚えておこう」と言って、息子はその石を他の石に混ぜた。すでに彼のポケットは石でいっぱいだった。

そうこうするうちに⁴⁾、険しい道をくだって世にも稀有な姿が現れた。

『遍歴時代』の第1章の口述開始」とある。Goethes Werke. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 143 Bde. Weimar 1887–1919 [=WA], Bd. 80, S. 210. 今回訳出する第1章から第4章までは、まず『遍歴時代』の一部として、コッタ書店発行の1810年版『婦人年鑑』(1809年秋刊行)に公表された。

3) an grauser, bedeutender Stelle : 2稿との相違はないが、初出の1810年版『婦人年鑑』では「ある分岐点で an einer bedeutenden Stelle」となっていた。Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1810. Mit Beiträgen von Goethe, Lafontaine, Pfeffel, Jean Paul Richter und andern. Mit Kupfern. Tübingen in der J. G. Cotta'schen Buchhandlung, S. III.『婦人年鑑』はBayerische Staatsbibliothekのデジタル・アーカイヴで閲覧可能。

<https://opacplus.bsb-muenchen.de/metaopac/search.do?methodToCall=parentSearch&dbIdentifier=100&forward=success&catKey=10615504> (最終閲覧2018年8月6日。)

4) 2稿では、ふたりの会話がさらに続き、森の物知りである狩人になりたいという好奇心旺盛なフェーリクスの様子が追加される：「…と言って、息

太陽のように美しいふたりの少年が、からげた肌着と見間違いそうな色鮮やかな上着に身をつつみ、追いかけっこをしながら飛びまわっていたのだ。一瞬、彼らは驚いてヴィルヘルムの前で立ちどまつたので、彼はふたりを間近で見ることができた。年上の少年の頭には豊かなブロンドの巻き毛が揺れ、ヴィルヘルムの視線はまずそこに向かわすにはいられなかった。次に明るい空色の瞳がヴィルヘルムの注意をひきつけ、彼はこの美しい少年の姿をうっとりと楽しんだ。ふたりめは兄弟というよりも友だちのように思われたが、茶色の癖のない髪の毛が肩にかかり、そこから反射した光が彼の瞳のなかに輝いているように見えた。

ヴィルヘルムには荒野で意表をつくふたりの風変わりな姿をじっくり観察するひまはなかった。というのも、厳格ながらも優しい男の声が上の岩場のカーブから響いてくるのが聞こえてきたのである。「どうしてつっ立っているんだい？ 道を遮らないでおくれ。」

ヴィルヘルムは目をあげた⁵⁾。すでに子どもたちに驚かされていたが、

子はその石を革の旅行鞄のなかに突っこみ、すぐに別のものを取りだして、『これは何？』と尋ねた。『木の実だね』と父親は答えた、『鱗片から判断すると、櫛のまつかさと似たものだろうね。』『まつかさのようには見えないけどな。だってまるいじゃない。』『狩人に尋ねてみよう。彼らは森や木の実のことなら何でも知っていて、撒き方、植え方、世話の仕方を心得ているから、樹木を成長させ、できるだけ大きく育てるんだ。』『狩人たちは何でも知っているんだね。昨日、人夫さんが、鹿が道を越えていった跡をぼくに教えてくれたんだ。ぼくを呼びもどして、彼の言う危険の跡を見せてくれたんだよ。ぼくはその足跡を飛びこえてみたけど、はっきりとふたつの蹄の跡が見えた。大きな鹿だったのかもね。』『おまえが人夫を質問攻めにしているのが、よく聞こえてきた。』『彼も物知りだったけれど、狩人ではないね。ぼくは狩人になりたいな。森のなかで一日中過ごし、鳥たちの鳴き声を聞いて、その名前や巣のありかを知り、卵やひな鳥を取りあげることができたら、なんて素敵なんだろう。餌をやって、大きくなったら捕まえる、本当に楽しいだろな。』

こんな話をしているうちに…』FA10, S. 263f.

5) 後述するように、1811年版『婦人年鑑』（1810年刊行）にコッタは、こ

このたび彼の目に入ってきたものは、ヴィルヘルムを完全に不思議な気分にさせた。たくましくがっしりした中肉中背の、軽装で、茶色の肌に黒髪のひとりの若者が、力強く、注意深く岩道をくだってきた。背後には一頭の驢馬がひかれていた。栄養よく手入れされた頭がまず見えたが、次に驢馬の背負っていた美しい荷物が目に飛びこんできた。具合よく取りつけられた大きな鞍に、たおやかで可憐な女性が座っていた。青いマントを身にまとい、生まれて間もない赤ん坊を抱いていた。子を胸に押しあて見つめる姿は、言葉をうしなう愛らしさであった。子どもたちと同じように、驢馬をひく男もヴィルヘルムを見て、一瞬、驚いた。驢馬は歩みをためらったが、坂道が急だったので、通行人たちは止まることができず、ヴィルヘルムは彼らが驚きながらそびえる岩壁の背後に消えていくのを見つめていた。

視界に入ってきたこの珍しい光景が、彼を考えごとから引きはなしたことはまったく自然だった。好奇心をあおられて立ちあがり、自分のいる場所から、彼らがまたどこからか現れないかと谷を見おろした。そしてちょうど彼も谷をくだり、この不思議な旅人たちにあいさつしようとしたとき、フェーリクスが駆けあがって来て、言った、「お父さん、あの子たちと一緒に彼らの家に行ってもいい？ 一緒においでって、言ってるんだ。お父さんにも来てほしいって、あの男の人が言ったんだよ。さあ！ 下でみんな待ってるんだ。」

「ぼくも彼らと話したいよ」とヴィルヘルムは答えた。

道の傾斜が緩くなったところで彼らが立ちどまっているのを見つけると、ヴィルヘルムは自分の注意を強くひきつけた不思議な人々をしげしげと眺

の場面を描いたフリードリヒ・ヴィルヘルム・グービッツの木版画を掲載し、予告されていた『遍歴時代』刊行の遅れをとり繕った。Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1811. Mit Beiträgen von Huber, Lafontaine, Pfeffel, Jean Paul Richter und andern. Mit Kupfern. Tübingen in der J. G. Cotta'schen Buchhandlung, S. XIV und 129.

めた。今初めて、ヴィルヘルムはひとりひとりの特別な様子に気がついた。頑丈な若者は、大工斧と長くて薄い鉄の曲尺を肩に背負っていた。子どもたちは、まるで棕櫚の葉のような大きな葦の束を担いでいた。そのために彼らは天使のようであったが、一方で食料の入った小さな籠を引きずっていたので、毎日のように山をあちこち越えていく人夫にも似ていた。よくよく見ると、母親は青いマントの下に赤くきれいに染色された服を身につけていた。しばしば絵画の題材にされるエジプトへの逃避を今ここで実際に目の当たりにしているのだと、われわれの友は感嘆せずにいられなかった。

あいさつは交わしたが、驚きのあまり注意深く観察していたヴィルヘルムは話しだすことができなかった。そこで若者が言った、「われわれの子どもたちはすでにこの瞬間、友だちどうしになっています。大人たちのあいだにも良い関係が築けるかどうか、確かめてみませんか？」

ヴィルヘルムは少し考えてから答えた、「あなたがた小さなご家族の様子を拝見して、私は信頼と愛情の念をかきたてられました。好奇心と、あなたがたとお近づきになりたいという強い願望を自状せずにはいられません。なにしろ一目見た瞬間から、こうお尋ねせずにはいられないのですから。あなたがたは本当に旅の方なのですか、それとも、もてなす主人もない山岳を気持ちのよい姿で活気づかせて楽しんでいる精霊なのですか？」

「さあ、わが家へどうぞ」と若者が言った。「一緒に行こう」子どもたちは呼びながら、すでにフェーリクスを引っぱっていった。「どうぞ、ご一緒に！」優しいまなざしを乳飲み子から見知らぬ男に移しながら、妻が言った。

躊躇なくヴィルヘルムは言った、「申し訳ありません、私はすぐにみなさんについていくわけにはいかないのです。少なくとも今晚は、上の国境いの宿場で過ごさなければなりません。旅行かばんや書類がすべてまだそこに置いたままで、荷づくりもできていないのです。しかしあながたのご親切な招待にお応えしたいという希望と意思を示すため、息子のフェー

リクスをお預けいたしましょう。私は明日まいります。お宅まではどれほどどの距離でしょう？」

「日没までには到着します」と大工は言った、「国境の小屋からは一時間半ほどの距離です。今夜はご子息がわが家をにぎわしてくれますね。明日はあなたをお待ちしております。」

男と驢馬は歩きはじめた。フェーリクスがあつという間に天使たちに溶けこみ、葦の束をつかみ、幼いほうの少年から小さな籠を取りあげて它的を見て、ヴィルヘルムは微笑しつつ考えこんだ⁶⁾。気を取りなおして、「どうやって家を探せばよいのですか」と呼びかけたときには、すでに一行は岩壁の向こうに消えようとしていた。

「聖ヨゼフと尋ねてください！」、谷から声が響いてきた。そしてみなのは青い陰の壁の向こうに消えてしまった。遠くから聞こえてくる敬虔な輪唱の声はだんだん小さくなっていたが、ヴィルヘルムには息子フェーリクスの声が聞きわけられるような気がした。

山を登るにつれ、日没も遅れていった。一度ならず見失われた太陽が、上に登ると再び彼を照らした。宿に到着したときも、まだ日は暮れていなかった。もう一度、ヴィルヘルムは偉大な山の景色を楽しんだ。それから部屋にもどり、すぐに筆をとって夜の一部を執筆で過ごした⁷⁾。

6) 2稿では、フェーリクスの本性についてヴィルヘルムが思いをめぐらす描写に差しかえられる：「ヴィルヘルムは、フェーリクスが素敵な人たちの仲間になったのを満足げに眺め、息子を愛らしい天使たちと比べることができた。たくましさの点で、フェーリクスは天使たちと著しく対照をなしていた。年齢のわりに彼は背が低かったが、頑丈で胸幅が広く、肩もがっしりしていた。彼の本性には支配と奉仕の独特的な混合があり、手にした棕櫚の枝と小さな籠が両者を物語っているように見えた。」FA10, S. 266f.

7) 初出の1810年版『婦人年鑑』ではここで第1章は終わり、以下のコメントが挿入されたあと、第2章が続いている。「オリジナルでは、ここでナターリエ宛て書簡が続く。これにより遍歴時代が導入され、修業時代へと結びつけられる。」Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1810, S. VIII.

「ヴィルヘルムからナターリエへ」

とうとう山頂に到着しました。この山の高さは、これまで歩いてきた平野全体よりも、私たちのあいだをさらに大きく隔てることになります。川の流れが愛する人々のほうへ流れているあいだは、まだ彼らのそばにいるように感じられるからです。だから今日はまだこんなふうに想像できます、森の小川に小枝を投げ入れれば、それは実際に彼らのいるあたりに流れていって、数日後には愛する人々の庭先に到着するだろうと。このようにして私たちの精神はそのイメージを、心はその感覚を、より快適に愛する人のもとに送り届けるのです。しかし山の向こうでは、想像力と感情をわけ隔てる壁がそびえているのではないかと心配です。しかしひょっとすると、それは性急な杞憂にすぎないのかもしれません。向こう側もこちら側も、違いはないのかもしれないですから。何も私を君からひき離すことなどできないのです！ たとえ奇妙な運命が私を君から隔て、私の近くにあった天国の扉を突然、閉めてしまっても、永遠に私のものである君から私をひき離すことはできないのです。私には気を落ちつける時間がありました。それでも、もし君の口から、あの決定的な瞬間に君の唇からこの自制を聞くことがなかったら、自分を自制する十分な時間はなかったでしょう。私たちをずっと永遠に結びつけてくれる糸が紡がれなかったなら、どうして私は出発することができたでしょう。ああ、しかし、私は何も話してはいけなかつたのですね。君の優しい命令を破るつもりはありません。君の前で別れという言葉を口にするのは、この山頂で最後にしましょう。私の人生は旅人となる定めなのです。私は旅人の奇妙な義務を遂行し、まったく独自な試練に合格しなければならないのです。君が私に命じ⁸⁾、私が自分

8) 2稿では「君 Du」 = ナターリエでなく、「結社 Verein が命じ」(FA10, S. 268) と変更される。変更のきっかけと推測されるのは、「最後にヴィルヘルムはナターリエに、一所にもっと長く滞在する許可を結社から得ることが、彼にとって肝要になりました」と書いています。そうすると、第一部

自身に命じたこれらの条件に目を通すとき、私はたびたび微笑します。守れるものもあれば、守れないものもあります。しかし、たとえ違反してしまったときにも、私の最後の懺悔であり免罪であるこの手紙と証言が、命令調の良心にかわって私の役に立ってくれます。私は正道に戻れるのです。私は用心していますので、もはや山水のように次々に失敗を重ねることはないでしょう。

それでも君に打ち明けようと思いますが、生徒にただ表面的で機械的な義務を課するような教師、指導者にはしばしば感嘆てしまいます。世間にはそれが都合がいいのです。というのも私の拘束のまさにこの部分は、初めはもっとも困難でもっとも奇妙なものと思われたのですが、今では私もそれをもっとも快適でお気にいりの義務と考えているのですから。

3日以上、同じ場所にとどまつてはならない。宿を変えるときは、少なくとも1マイルは離れたところに行かねばならない。私の人生を放浪の日々にし、少しでも自分自身のもとに戻る道を見つけさせないためには、これらの掟は確かに適しています。これまで私はこの条件をしっかりと守ってきました。それどころか、許されていることですらこれまで使ったことがなかったのです。この場所で初めて、私は3日間同じベッドで眠ることになるのです。ここから私は君に、これまで聞いたこと、見たこと、書かずにとっていたことを送ります。そして明日早朝、反対側に下りていって、まずはある立派な家族のところに向かいます。聖家族と言いたいようなこの家族については、君は私の日記のなかにもっと多くを見つけることになるでしょう。お元気で。この手紙を読みおえ、手から置くときには、この手紙が言いたかったことはただひとつであると感じてください。この手紙は一つのことを訴え、何度も繰りかえしたがっているのです。しかし再び君の足もとにひれ伏し、我慢しなければならなかつたすべての辛さ

の最初の手紙は修正されねばなりません。その手紙によれば、掟はナタリエに発していると思われるからです」というエッカーマンの意見である。

Vgl. WA29, S. 3.

を思いだして、君の手の上に存分に涙を流す幸せを手にするまでは、言うつもりも、繰りかえすつもりもありません。

—
朝

荷物は詰めこまれ、人夫が旅行かばんを背負い籠の上に結びつけました。まだ太陽は昇っていません。大地一面から霧がたちこめていますが、上空は澄んでいます。私たちはまだ暗い谷へとくだっていきます。そこでもまたなく、私たちの頭上に陽が照ることでしょう。私の最後の嘆きの声を君に送らせてください！ 君に向けた最後のまなざしに、思わず涙があふれるのを許してください！ 私は決心しました。もう君にぼくの嘆きを聞かせることはできません。旅人が出会うことだけをお聞かせしましょう。それでも筆を置こうとすると、さまざまな思いや願いそして計画が今一度、私の心に交錯します。幸運にも、旅立つよう急かされています。使いの男が呼んでいます。宿の主人は、まるで私がもう出発したかのように、私のいるところで部屋の片づけをしています。まるで冷徹で配慮の足りない遺産相続人たちが、自分のものにできるものはないかと物色する気持ちを、死者の前でも隠すことがないように。

第2章
聖ヨゼフ二世⁹⁾

旅人はぴったりと人夫のあとを追い、はや険しい岩場をあとにした。彼らはおだやかになった中間地域を歩きまわり、感じのよい森や気持ちのよい草原を次々に通りぬけ、ついにひとつの斜面に到着した。彼らは丘のま

9) ゲーテが最初期に構想した部分と考えられる。ゲーテは、1799年5月10日付けのハインリヒ・マイヤー宛て書簡で、聖ヨゼフの物語を描いた連作絵画について問い合わせ、同日、マイヤーは、もっとも完全な物語を描いた作品としてカルロ・マラッティの連作を紹介している。FA31, S. 673 u. vgl. S. 1119f. 1807年5月18日の日記には「6時30分に『遍歴時代』の続き、第2章に進む」とある。WA80, S. 210.

わりをめぐって念入りに耕された谷を見おろした。なかば瓦礫となっていたが、一部はよく保存された大きな修道院の建物がすぐに注意をひいた。「これが聖ヨゼフです」と人夫は言った。「美しい教会なのに気の毒なことです！ 瓦礫となって何百年も経ちますが、やぶや木々のあいだから、柱や梁がきれいに保存されているのが見えるでしょう。」

「それに対して修道院の建物は」とヴィルヘルムは答えた、「私の見たところ、まだよく保存されているね。」「そうですね」と相手が言った、「管理人があそこで住んで世話をしていて、ここら一帯で支払いの義務のある者たちから、地代や十分の一税を取りたてているんです。」

こうした会話をしながら、彼らは開放されていた門を通って大きな中庭に到着した。そこはよく保存された厳肅な建物に囲まれて、静かな落ちつきが宿っていた。中庭で遊んでいた子どもたちのなかに、ヴィルヘルムは息子フェーリクスを見つけた。他の子どもたちは、昨日のふたりの天使たちだった。三人組はヴィルヘルムのところに勢いよく走ってきてあいさつすると¹⁰⁾、「お父さんはまもなく帰ってくるよ、しばらく広間で休んでいるといいよ」と言った¹¹⁾。

子どもたちが広間と呼んだその部屋にヴィルヘルムを案内したとき、彼はどれほど感嘆しただろう。中庭からすぐに続く大きな扉から、旅人は非常に清潔で手入れのいきとどいた礼拝堂に入った。この礼拝堂はよく見る

10) 2稿では、フェーリクスの性質を示すエピソードが追加される：「ヴィルヘルムはすぐに、息子フェーリクスが昨日の天使たちと一緒に、ひとりのがっしりした女性が下ろした背負い籠をとり廻んでいるのを見た。彼らはさくらんぼを買おうとしていた。正確には、いつも小銭を持っているフェーリクスが値切っているところだった。それが済むと、彼はすぐに客からもてなす側となって、遊び仲間たちに果実をたっぷり与えてやった。父親にすらこの爽快な食べ物は心地よかった。こうした実りの乏しい苔むす森中では、色つやのよい果実がさらに美しく見えたのだった。『下の大きな果樹園からはるばる運んでいるんですよ』とさくらんぼ売りの女は言って、少々高めにつけられた値段が妥当なことを主張した。」FA10, S. 270f.

11) 2稿では文章が若干異なるが、内容には変更なし。Ebd., S. 271.

と、日常生活に利用できるようしつらえられてあった。一方にはテーブル、ひじかけ椅子、いくつかの椅子とベンチがあり、もう一方には、立派な彫刻の施された棚に色とりどりの陶器、甕、グラスが置かれていた。長持ちや木箱もあり、すべてが整然としているながら、日々の家庭生活の魅力で欠けるものは何ひとつなかった。側面の高い窓から光が差しこんでいた。しかし旅人の注意をもっともひいたのは、壁に描かれた色とりどりの絵であった。それはかなり高いところにある窓の下で、まるでタペストリーのように礼拝堂の三つの部分をぐるりとめぐり、残りの壁を地面まで覆っている羽目板のところまで続いている。それらの絵は聖ヨゼフの物語を描いていた。こちらの絵にはヨゼフが室内作業をしている姿が見られ、あちらの絵ではヨゼフはマリアと出会い、ふたりのあいだには一輪の百合の花が地面から芽ぶき、まわりには天使たちが様子をうかがうように漂っていた。次の絵でヨゼフは結婚し、天使たちのあいさつが続く。はじめた仕事を中断し不機嫌に座っているヨゼフは、斧を置き、妻を置きざりにしようとしている。しかしこれで天使が彼の夢に現れ、彼の状況は変わる。敬虔な気持ちで彼はベツラムの厩の新生児を見つめ、その子に歩みよる。それから次に、驚くほど美しい絵が続く。種々の木組みが見える。ちょうど組みたてられようとして、偶然にも二、三の十字架ができる。子どもは十字架の上で眠りこみ、母はその横に座って、心からの愛情をこめて子どもを見つめている。義理の父は、眠りの妨げにならないよう、仕事の手を休める。そのあとすぐに続くのがエジプトへの逃避である。絵を鑑賞していた旅人は、昨日の生きた絵画をこの壁の上に見て、微笑みを浮かべずにいられなかつた。

それほど長く絵を眺める間もなく、主人が入ってきた。聖なる旅人たちを率いていたあの男であることはすぐにわかった。ふたりは親しくあいさつを交わし、さまざまな話が続いた。しかしヴィルヘルムの注意はあの絵画に向かったままだった。主人は客の関心に気づくと微笑んで話しあ始めた。「あなたはきっとこの建物と、あなたが昨日知りあったこの家の住人

たちとの一致に驚いていらっしゃるのでしょう。そして、この建物が住人たちをつくったのだと考えねばならないとなると、この一致をもっと不思議に思われるかもしれません。しかし、無生物であっても活気を呼びれば、それが生命あるものを生みだすこともできるのです。」

「ええ、そのとおりですね」とヴィルヘルムは答えた。「何世紀も前にこの山中で力強く影響力を及ぼし、建物、所有地そして種々の権利を持った巨大なひとつの集団を意のままにし、そのかわりに、このあたりに多様な文化を広めた精神が、たとえ瓦礫からであっても、その生命力を今生きている者に發揮することがなければ、私はいぶかしく思わずにはいられません。しかし一般論に固執するのはやめましょう。あなたがたの物語を聞かせてください。戯れも思いあがりもなく、過去があなたがたのなかに再び姿を現し、過ぎさったものがもう一度甦るということがいったいどうして可能だったのか、私に教えてください。」

ヴィルヘルムが主人の口から答えとなる返事を期待したちょうどそのとき、優しい声が中庭から聞こえてきて、ヨゼフの名を呼んだ。主人はその呼びかけを聞いて、扉のほうに向かった。

「では彼もヨゼフというのか！」ヴィルヘルムは独りつぶやいた。それだけでも十分奇妙なことだが、彼が実生活で聖人ヨゼフを演じていることほどではない。彼が同時に扉のほうに視線を向けると、昨日見た聖母が夫と話しているのが見えた。会話を終えたふたりは離れ、妻は向かいの住居のほうに歩いていった。「マリー！」夫が妻に声をかけた、「もう一言だけ。」「では彼女もマリアというのだな」、ヴィルヘルムは考えた、「これでは1800年前に戻ったようだ。」自分が今いる厳肅な雰囲気の谷間、瓦礫そして静けさを思い、彼は不思議と古代めいた気分におそわれた。そこに主人と子どもたちが入ってきた。子どもたちはヴィルヘルムを散歩に誘った。そのあいだに主人のほうはまだ残っている仕事を片づけてしまいたいということだった。そこで彼らは、柱の多い教会の廃墟となった建物を通っていった。高くそびえる切妻屋根と壁は、風雨にさらされて堅牢さを増

しているように見えた。一方で、古い頑丈な木々が幅広い壁裏に根を張り、さまざまな草花や苔とともに、大胆に空中に揺れる庭園をつくりあげていた。なだらかな草地の小径が激しい流れの小川に沿って通じていた。旅人は小高い場所から建物とその立地状況を概観することができた。ヴィルヘルムにはそこに住む人々がますます特異な存在に思われ、しかも彼らをとりまく状況との調和が彼の好奇心をこの上なく高めていたのだから、それだけいっそう強い関心をもって眺めた。

散歩からもどると、敬虔な広間に食事の用意ができていた。上席にはひじかけ椅子が置いてあり、そこに主婦が座った。彼女のわきには背の高い籠があり、そのなかに赤子が眠っていた。父親は左手に、右手にはヴィルヘルムが座った。三人の子どもたちは食卓の下座に着いた。老いた女中が見事に調理された食事を運んできた。食器もグラスも古い時代を偲ばせるものだった。子どもたちは会話のきっかけをつくったが、ヴィルヘルムは聖なる女主人の立ち居振る舞いを見飽きず観察した。

食後は、みなばらばらに解散した。主人は客人を廃墟の陰になった場所に連れていった。その高みからは、谷間を見おろす美しい光景が一面に広がっていて、下のほうの土地の山の肥沃な斜面と森となった尾根が交互に突きでているのが見えた。「あなたの好奇心を満たしてさしあげることは当然のことでしょう」と主人は言った、「たとえ不可思議なものであっても、厳格な理由にもとづいていれば、あなたはそれを厳格に受けとめてくださる方だと、私自身が感じているのですからなおさらです。見てのとおりの残骸となったこの宗教施設は聖家族に捧げられたもので、かつては、いくつかの奇蹟ゆえに有名な巡礼地でした。教会は聖母と御子イエスに捧げられたもので、すでに何百年も前から瓦礫となっています。聖なる養父に捧げられた礼拝堂のほうは保存され、修道院の建物の使用可能な一部も同様です。収入を得ているのはもうかなり以前からある世俗領主で、彼が管理人をここに住まわせています。それが前管理人の息子である私です。私の父も、同様にその父からこの地位を受け継いだのでした。

教会として崇拜されることは久しく中断していましたが、聖ヨゼフはわれわれ家族にとって非常にありがたい存在でしたので、誰もがこの聖人に特別な好意を寄せていたことは驚くにあたりませんでした。そこで私はヨゼフという洗礼名を受け、これによりある程度私の人生は定められたのでした。私は成長し、徵収の管理をする父の仲間に加わりましたが、同じくらい、いえさらに望んで、力に応じて施与することを好み、善意と善行によって山岳一帯に知られ愛された私の母に従いました。母はやがて、ものを届けたり、めんどうを見たり、世話をするために、私をあちらこちらへと使いにやりました。私はこのような敬虔な任務にやすやすと順応することができました。

そもそも山地での暮らしへは、平地での生活以上にどこか人間的なところがあります。住人たちは互いにより近しい関係ですが、望めば平地の場合よりも離れて暮らすこともできます。必要なものは比較的少ないのですが、より切実です。平地の人よりも自立しており、自分の手足を頼りにすることを学ぶ必要があります。労働も使いも荷物運びも、すべてをひとりの人間が行ないますが、平地の場合よりも、みなが互いの近くで生活し、よく顔を合わせ、共同で作業をしています。

私がまだ若く、肩でそれほど多くを担げなかったころ、籠を背負わせた驢馬に前を歩かせ、険しい小径を上り下りすることを思いつきました。平地では馬で畑を耕す作男が、牛で畑を鋤きかえす者よりも自分を上であると考えるようですが、山中では驢馬は平地ほど軽蔑された動物ではありません。驢馬には幼子キリストとその御母を運ぶという栄誉が与えられたことを、幼少期より礼拝堂で学んできましたので、なおさら躊躇なく、私は驢馬のうしろについていきました。しかしこの礼拝堂は当時、現在のような状況ではありませんでした。それは物置小屋として、いえ、ほとんど家畜小屋のあつかいだったのです。薪、竿、道具類、大桶、はしご、とにかく何でも積みかさねて押しこめられていました。絵がかなり上方にあり、腰板がいくらかもちこたえていたのは幸いでした。すでに子どものときか

ら、木材をあちらこちらとよじのぼり、誰も私に正しく説明することのできなかった絵画を観察することが、私のなによりの楽しみでした。私の名親である聖人の人生が上方に描かれていることはよくわかつっていました。まるで自分の叔父であるかのように、私はこの聖人を眺めるのを楽しみました。私は大きくなりました。収入のある管理人の仕事を要求するには手仕事を営む義務がある、という特別な条件がありましたので、将来、このありがたい教会禄を私に継がせたいと希望する両親の意思にしたがい、私は手仕事を習わされることになりました。しかも同時に、この山上で経済的に役立つものを、ということでした。

私の父は桶屋職人で、仕事に必要なすべてのものを自分で作りました。そこから父にも地域全体にも大きな利益が生まれました。しかし私には父の仕事を継ぐ決心はつきませんでした。私の願望はいやおうなしに大工に向かいました。わが聖人のわきに描かれた大工道具を、少年のころから詳細に観察してきたものですから。自分の希望を告げたところ、私は反対されませんでした。さまざま¹²⁾ 建物を建築するにあたり、大工は私たちにとって必要な存在でしたし、とりわけ森林地域では、それなりに器用でより繊細な仕事を愛する場合、指物師や彫刻師の芸術はまったく自然の道であってみれば、なおさらのことです。さらに私がいっそう高い望みを強めことになったのは、残念ながら今ではすっかり消えかかっているあの絵画のためでした。その絵が何を表現しているかを知れば、謎がお解けになるでしょう。のちほど、その絵の前にお連れします。聖ヨゼフに、ヘロデ王のための椅子を作るという難しい課題が任せられました。壮麗な椅子は現存する二本の柱のあいだに配置されなければなりません。ヨゼフは慎重に幅と高さを測り、見事な玉座を作りました。しかしその立派な玉座を運びこんだとき、彼はどんなに驚き狼狽したことでしょう。椅子は高すぎ、幅は十分ではなかったのです。ご存じのとおり、ヘロデ王に対して冗談では

12) 2稿では「実にさまざま so mancherlei」と so が追加される。FA10, S. 276.

すまされません。敬虔な大工は困りきってしまいました。幼子キリストは、どこにでも養父についてゆき、無邪気におとなしく遊びながらヨゼフのところに仕事道具を運ぶのが日課でしたが、彼の苦境に気づき、すぐに助言をして彼を助けました¹³⁾。奇蹟の子イエスは養父に、玉座の片側をつかむよう頼みました。そして自分は彫刻の施された作品のもう一方をつかみ、ふたりは引っぱりはじめました。まるで皮でできているかのように、玉座は簡単に幅を広げ、その分、高さが縮まり、空間にぴったり収まりました。ほっとした親方は非常に慰められましたし、王さまもすっかり満足されました。

私が青年だったころは、その玉座はまだかなり見えていたのです。片側の残りの部分をよく見ていただくと、椅子に施された彫刻のこの上ない技巧にお気づきになるでしょう。もちろんそのような要求は、大工よりも画家にとって容易であったことには違いありません。だからといって私は心配することもなく、専念していた手仕事を非常に光栄なものとみなし、修業に出るのが待ちきれませんでした。近くにひとりの親方が住んでいて、この地域全体のために働き、何人かの職人や徒弟を雇うことができましたので、これはいっそう容易に遂行されました。つまり私は両親の近所にとどまり、休憩時間や休日は、母がひき続き頼んできた慈善活動の使いをこなすために利用し、これまでの生活をある程度は継続することになったのです。」

第3章¹⁴⁾

訪問¹⁵⁾

「こうして数年が経ちました」と語り手は続けた、「私はすぐに手仕事を

13) 2稿ではzur Hand seinから bei der Hand seinに変更される。Ebd.

14) 2稿では第2章のまま続く。Ebd., S. 277.

15) 1807年5月19日の日記には「7時に第3章『訪問』を口述する」とある。WA80, S. 211.

利点を理解し、仕事に鍛えられた私の肉体は、作業に要求されることは何でもひき受けることができました。仕事の合間には、善良な母のために、あるいはむしろ病人や困っている人々のために、昔ながらの奉仕も続けました。私は驢馬とともに山中をまわり、荷物をきちんと配分し、帰りには、小売商や商人からこの山の上では足りないものを持ちかえりました。

親方は私に満足し、両親も同様でした¹⁶⁾。かねてより私は、建設や装飾の仕事を手伝ったいくつかの建物を、道すがらに眺めて楽しんでいました。というのも、山岳地の木造建築に非常に楽しい外観を与えるため、最後の仕上げで梁に刻み目を入れたり、特定の単純なパターンを彫りこんだり、装飾模様を焼きつけたり、いくつかのくぼみを朱く塗ったりする仕事は、とりわけ私に任されていたのです。ヘロデ王の玉座やその美しい装飾のことをいつも考えていた私は、この技術にもっとも秀でていたものですから。

救助を必要としている人々のなかで母が特別に配慮したのは、身重の若い女性たちでした。この場合、私にはその仕事内容が秘密裏に行なわれるのが常でしたが、私もだんだんと勘づくようになりました¹⁷⁾。その際、私には直接的な仕事は一切なく、すべてはひとりの善良な女性によって仕切られました。彼女はそれほど遠くないふもとの谷に住んでいて、エリーザベト夫人と呼ばれていました。私の母自身も、子どもが誕生する際に諸々手助けする助産婦の技を熟知しており、エリーザベト夫人とは長らく懇意な関係だったのです。それで私は、丈夫な山の住人たちの多くがおのれの誕生に際しこのふたりの女性に恩義を受けていることを、いろいろな方面からたびたび聞かされることになりました。秘密をたずさえた私を夫人はいつも迎えいれ、そして自分には理解できない謎めいた質問に対して簡潔な回答を与えてくれました。それが彼女に対する特別な畏敬の念を私に抱かせ、非常に清潔だった彼女の家は、私には小さな聖堂のように思われたのでした。

16) 2稿では改行なし。Ebd., S. 277.

17) 2稿では文章が若干異なるが、内容には変更なし。Ebd., S. 278.

この間、私は、私の知識と手仕事の活動によって、家族にかなり影響力をもつようになっていました。桶職人である父が地下室の手入れをするように、今では私が屋根や壁の手入れをし、古い建物の傷んだ部分をあちこち修理しました。いくつかの崩れた納屋や物置を家事のために使えるようにしました。それを済ますとすぐ、私は大好きな礼拝堂を片づけたり掃除したりしはじめました。礼拝堂は数日で片づき、ほとんど今ご覧になっている状態になりました。腰板が欠けたり損傷している部分を、すぐに再び完全な姿に修復しようと努力しました。入り口の両開きのこの扉を、あなたは非常に古いものとみなされているのではないかと思いますが、実は私の手による仕事なのです。まず頑丈な檜の木の厚板から全体を巧みに組みあわせたあと、私は数年を費やして、空いた時間に彫り続けたのです。このときまで傷まず、消えていなかった絵画は、まだもちこたえていました。ステンドグラスを制作してもらうことを条件に、ある新築工事の際に私はガラス職人の手伝いをしました。

あの絵画を眺め、あの聖人の人生に思いを馳せて、私は想像力をかきたててきましたが、この空間を再び聖堂とみなすようになり、とりわけ夏の季節にそこで過ごして、見たものや想像したものについてゆっくりと熟考することができるようになると、すべてがますます激しく私の心に迫ってきました。私のなかには、あの聖人のあとに継ぎたいという逆らいがたい気持ちがあったのです。同じような出来事は簡単により起こせるものではありませんから、私はせいぜい小さなことからはじめて、彼に倣うことにしました。荷を運ぶ驢馬を使うことで、実はとうの昔からそのようなことをはじめていたわけですけれど。これまで使用してきた小さな驢馬では物足りなくなり、もっと堂々とした驢馬を探しもとめ、具合よく設えられた鞍を用意し、乗馬するにも荷を詰めこむにも快適になりました。数個の新しい籠を調達し、色とりどりの紐や毛くずや小さな房かざりで編んだ網に、チリンチリンと鳴る金属棒を取りつけて、それで驢馬の首を飾りました。すると驢馬は壁にかかったお手本の絵と並んでも遜色ない姿となりました。

このような行列で山中を歩きまわっても、誰も私をばかにしようとはしませんでした。慈善活動に対しては、奇妙な外観も大目に見られるものなのです。

そのうちに戦争が、というよりもむしろ戦争の影響が、私たちの地方に近づいていました。ならず者の浮浪者たちの危険な一団がたびたび集まり、あちらこちらで狼藉をはたらいたり、気ままな行動をとっていました。地方民兵のすぐれた組織、パトロール隊そして臨時の警備によって、この災いはまもなく収まりましたが、もとどおりの不用心にもどり油断するとすぐに、再び新たな災いが起こりました。

私たちの地方が静かになってだいぶ経ってからのこと、私は自分の驢馬とともにいつもの小径をゆっくり歩いていました。ある日、種まきされたばかりの森の空き地を越えて、保護区域を示す濠の縁にひとりの女性が座っている、あるいはむしろ横たわっているのを見つけました。彼女は眠っているか、あるいは気を失っているようでした。私が介抱すると、その女性は美しい目を開き、起きあがって大きな叫び声をあげました、「彼はどこでしょう？ 彼を見かけませんでしたか？」「誰をですか」と私が尋ねると、「私の夫をです」と女は答えました。彼女は非常に若々しい様子でしたので、私にはこの答えが思いがけないものでした。しかしそれゆえにいっそ彼女のそばに寄りそい、私の同情が確かなものであるとわかつてもらえるよう努めました。聞いたところでは、このふたりの旅行者は道の悪い車道を避け、より近い歩道を行こうと車から離れたそうです。この近くでふたりは武装した者たちに襲われ、彼女の夫は剣で闘いながら離れてゆき、彼女は夫のあとについていくことができず、この場所で倒れていたそうです。どれくらい時間が経ったかも、彼女にはわかりませんでした。彼女は、自分を置いて夫のあとを急いでほしいと私に切に願いました。自力で立ちあがると、その非常に美しく愛らしい姿が目の前に現れましたが、私はすぐに、彼女が私の母やエリーザベト夫人の助けをまもなく必要とする状態であることに気づきました。私たちはしばらくもめました。という

のも、私はまず彼女を安全な場所に連れていくことを望み、彼女のほうは、第一に夫に関する報告を望んだのです。彼女は夫の辿った道から離れたがらず、新しい狼藉の報告を受けて活動をはじめた民兵の部隊が森を通ってこちらに進んでこなかったら、どれほど私が抗議しても徒労だったことでしょう。私たちは民兵たちに説明をし、彼らと必要なことの申しあわせをしました。落ちあう場所が決まり、こうして今回の事件に対する処理がなされました。私は、これまでにもしばしば物置として利用したことのある洞穴に私の籠を素早く隠すと、鞍の座り心地を快適に調整し、不思議な感情を抱きながらも、この美しい荷を私の従順な驢馬の背に乗せました。驢馬はすぐに慣れた小径を見つけだし、私はその横に並んで歩くことになりました。

くどくどと語らなくても、私の奇妙な心境を理解していただけると思います。長らく探していたものを、私はついに見つけたのですから。私は夢を見ているような、そしてすぐさま、再び夢から目覚めた心地になりました。空を漂うように緑の木々の前を揺れ動く天使のような姿は、礼拝堂のあの絵画によって私の心にひき起こされた夢のように思われたのです。あるいは、あの絵画こそ夢にすぎず、今ここで美しい現実となって現れたようにも思われました。私がいろいろと訊ねると、悲しみにくれながらも気を確かにもった女性にふさわしく、彼女は優しく丁寧に答えてくれました。見晴らしのよい高台にくると、立ちどまり、あたりを見まわして聞き耳を立てるようにと彼女は何度も頼みました。長い真っ黒な睫毛の奥から嘆願するような眼差しを向けて、優美に願うものですから、私はできることは何でもせずにはいられなくなりました。ぽつんと高くそびえる、枝もない唐檜によじ登りました。普段の手仕事のためのこのような芸が、私にとってこれほどありがたかったことはありません。お祭りや歳の市で、同じような高所からリボンや絹の布を下に落としたときでも、これほどの満足感を得たことはありませんでした。しかし今回は残念ながら収穫はありませんでした。登っても何も見えず、何も聞こえなかったのです。ついに

彼女のほうから私に下りてくるようにと叫び、激しく手を振ってくれました。下りるときに、比較的高いところから飛びおりると、彼女は呼び声をあげ、無傷の私を確認すると、彼女の顔には親しみにあふれた甘い表情が広がりました。

彼女にとって道中が快適に¹⁸⁾なるようにと、彼女の気がまぎれるようにと行なった数々の親切について、長々とあなたにお話します。また、どうしてそんなことができるでしょう！一瞬にして無を全にすることこそが、眞の親切の特徴なのですから。私の感情にとって、彼女のために手折った花や、彼女に説明した遠くの一帯、名前を教えた山や森は、人が贈りものによってそうするように、彼女との関係を築くために、彼女に捧げようと私が考えた非常に高価な宝物だったのです。

あの善良な女性の家の戸口に到着するころには、私はすっかり自分の全生涯を彼女に捧げる気持ちになってしまい、彼女と離れることはたいそう辛いものでした。もう一度、私は彼女の全身をじっくりと眺め、視線が足元まで下りたとき、馬の腹帶のあたりをいじるそぶりで身をかがめると、これまでの人生でもっとも愛らしい靴にこっそりとキスをしました。彼女が下りるのを手伝い、階段を駆けあがると、戸口のなかへと呼びかけました、「エリーザベト夫人、お客様さまです！」善良な夫人が現れ、家から飛びだしていく彼女の肩越しに、美しい人が階段を上り、優美な悲しみと内面には苦悩する自負心を抱えながら、わが尊敬する老婦人を心から抱擁するのを、私は見ていました。そして彼女は、エリーザベト夫人につきそわれ、良いほうの部屋へと去ってゆきました。彼女たちは部屋に鍵をかけてしまい、私は驢馬の傍らで戸口に立っていました。貴重な荷物を下ろして、もとどおりの貧しい驢馬追いに逆もどりした男のようでした。」

18) 初稿の *gefällig* が、2稿では *angenehm* に変更される。Ebd., S. 281.

第4章¹⁹⁾
百合の茎²⁰⁾

「私はまだ立ちさるのをためらっていました。どうすればよいのか、わからなかつたのです。そこにエリーザベト夫人がドアを開けて出てきて、母を呼んでくるように、そしてなんとかして彼女の夫の消息を調べるようにと頼みました。マリーがあなたにぜひともお願ひしていると、彼女は言いました。「もう一度、彼女と直接話してもよいですか」と私は返しました。「それは無理よ」とエリーザベト夫人に言われ、私たちは別れました。すぐに私は家に到着し、母はその夜のうちに山をくだつて、よそ者の若い女性を助ける用意ができました。私は急いで下の村に下りていきました。郡長のもとならもっとも正確な情報が得られると期待したからです。しかし郡長にもまだ詳細はわかりませんでした。私は彼の知りあいだったので、この日はもう彼のところに泊まっていくようにと言われました。この夜は永遠に続くように思われ、私の目の前にはずっと、あの美しい人が驢馬の背に揺られ、辛さをこらえつつ、やさしく私を見おろしている様子が浮かびました。今か今かと報告を待ちわびました。善良な夫が生きていることを願いつつ、しかし彼女を未亡人として想像する喜びも感じていました。巡回する部隊が徐々に集まり、さまざまなうわさが飛びかったあと、ついに真相が明らかになりました。車は助かったものの、不幸な夫は、受けた傷のせいでとなり村で亡くなっていました。あらかじめの申しあわせどおり、この訃報をエリーザベト夫人に伝えるべく数人が出発した、とも聞きました。つまり、私にはもうするべきことは何も残っていなかったのですが、果てしない焦燥と際限ない欲望にかられ、山と森を越えて私は再び夫人の家の戸口に立っていました。時刻は夜、家は閉まっていました。私は

19) 2稿では第2章のまま続く。Ebd., S. 282.

20) 1807年5月20日の日記には「8時に第4章『百合の茎』」とある。

WA80, S. 211.

部屋の灯りとカーテンにうごめく人影を眺めていました。向かいのベンチに座り、何度もドアを叩こうとしましたが、その度にさまざまな考えが浮かび、思いとどましたのでした。

しかし何の関係もないことを、これ以上くどくどとお話しする必要がありましょうか。要するに、私は翌朝になっても家に入れてもらえませんでした。悲しい知らせはすでに届いていて、私は用無しでした。父のもとに戻り仕事をするようにと言われました。私の質問には答えようとせず、私を厄介払いしたがっていました。

一週間そのようにあしらわれましたが、とうとうエリーザベト夫人が私をなかに入れてくれました。「静かに入ってちょうだい」と彼女は言いました、「でも心配せず近づいていいのよ！」彼女は私を清潔な部屋に案内しました。片隅にある寝台のなかば開かれた帳から、あの美しい女性が身体を起こして座っているのが見えました。エリーザベト夫人は彼女に近づき、あたかも私の来訪を伝えるために、何かを寝台から持ちあげ、私のほうに差しました。白い布に包まれた珠のような男の子です。エリーザベト夫人はその子をちょうど私と母親とのあいだに差しました。その瞬間に、私には百合の茎のことが思い出されました。あの絵画のなかでマリアとヨゼフのあいだに、純粹な関係の象徴として大地から芽ばえた百合のことです。私の心からあらゆる重圧が取りのぞかれ、私は自分の使命と運命を確信しました。私は自由な心で彼女に歩みより、彼女と話し、その天使のような視線を受けとめることができました。赤子を腕に抱き、その子の額に心を込めてキスすることができました。

「孤児となったこの子に愛情を寄せてください、ありがとうございます」と母親は言いました。——軽率にも私は大声で叫びました、「お望みくださいれば、この子はもう孤児ではありません！」

私よりも賢明なエリーザベト夫人は、私から子どもを取りあげ、私を部屋から追いだしました。

山や森を抜けて歩きまわらなければならないとき、あのころのことを思

いだすのがいつも私のもっとも幸福な楽しみです。どんな些細なことも覚えていますが、あなたにお話しするのは控えるのが賢明でしょう。数週間が過ぎ、マリアは回復していました。私はときどき彼女と会うことができました。彼女との交際は奉仕と優しい心づかいの連続でした。彼女の家庭の事情は、彼女に好きなところに住むことを許容するものでした。最初、彼女はエリーザベト夫人のもとに留まりました。それから私たちのもとを訪問し、多くの親切な援助に対して母と私に感謝を述べました。彼女は私たちのところが気にいりましたが、理由の一部は自分にあるものと私はうぬぼれました。あれほど言いたかったのに言えずにいたことが、風変わりな愛すべきやり方で言葉となって現れたのは、当時、すでに生活できる広間に造りなおしていた礼拝堂に、彼女を案内したときのことでした。私は絵画を指さし、彼女に一枚ずつ説明していきました。私が養父の義務を生き生きと心を込めて解説すると、彼女の目には涙が浮かびました。私は絵の説明を最後まで続けることができませんでした。彼女の夫の思い出をすぐにでも消しさろうとするほど、私は高慢ではありませんでしたが、それでも彼女の愛情を確信しました。法律は未亡人に一年間、喪に服することを義務づけていますが、あらゆる地上の事物の移りかわりを内包するこの期間は、感じやすい心が大きな喪失による痛ましい印象を和らげるために、ぜひとも必要なものなのです。花が咲き、散り、しかしまだ果実が熟し、新しい芽が吹きます。生命は生きるものに属しますが、生きるものは交替を覚悟しなければなりません。

それから私は、私の心に非常に切実となった問題について母親と話しました。マリーにとって夫の死がどれほど辛いものだったか、彼女がただ独りで、子どものために生きなければならぬという信念によって生きる気力を取りもどしたことを、母は私に明かしました。それでも私の愛情は婦人たちに周知のものでしたし、マリーも、私とともに生きるという考えにすでに慣れていきました。彼女はなおしばらくは隣人として過ごし²¹⁾、

21) フランクフルト版では初稿、2稿ともに leben で変更ないが、ミュンヒ

それから私たちのもとに引っ越ししてきました。私たちは非常に敬虔で幸福な婚約期間をしばらく経たのち、ついに結婚したのでした。私たちを結びつけたあの最初の感情は失われませんでした。養父の義務と喜びは実父のそれとひとつに溶けあいました。そして私たち小さな家族は数を増やし、人数では聖家族を超ましたが、手本である方々の美德を、心の誠実さと純粋さにおいて、私たちは聖なるものとして守り鍛えました。こうして私たちは、偶然に到達したことですが、親しみやすい習慣として私たちの内面としっくり合った外観も手にいれたのです。というのも、私たちは全員、健脚で丈夫な人夫ではありますが、仕事や訪問でこの山や谷を越えていかねばならないときには、あれこれの荷物を運搬するために、荷を運んでくれる驢馬を仲間としていつも必要とするからです。昨日あなたが私たちを見かけたような姿で、この辺りの人々も私たちのことを知っています。私たちの生活態度が、私たちの手本である聖なる方々の名と姿を汚さないものであることに、私たちは誇りをもっているのです。」²²⁾

「ヴィルヘルムからナターリエへ」²³⁾

これで私の愉快で少し不思議な物語は終わりです。この話を私はある非常に²⁴⁾健気な男から聞いて、君のために書きとめたのです。全部が彼の言葉どおりでなく、彼の考えを述べる際に、私がところどころで自分の意見を表明したとしても、ここで私が彼に感じた親近性を考えれば、まったく自然なことだったのです。彼の妻に対するあの崇拜ぶりは、私が君に感じているものと同じではないでしょうか？ そしてこの愛しあうふたりの出

エン版では初稿の leben (MA17, S. 36) が、2 稿で verleben (Ebd., S. 261) に変更されている。

22) 初出の 1810 年版『婦人年鑑』ではここで第 4 章が終わっていた。

23) 2 稿ではここから第 3 章となる。FA10, S. 286.

24) フランクフルト版では初稿と 2 稿はどちらも gar で強調されているが、ミュンヒエン版では初稿 (MA17, S. 37) にはある gar が 2 稿 (Ebd., S. 261) では消えている。

会いさえも、私たちのそれとどこか似ていないでしょうか？ 彼は十分に幸せで、二重に美しい荷を運ぶ驢馬の傍らを歩き、家族とともに夕方には古い修道院の門に入ることができ、愛する人とも家族とも離ればなれになる必要がないことを、私がひそかに羨ましく思っても、きっと許されることでしょう。それにひきかえ私ときたら、わが運命を嘆くことも許されないのです。私は君に沈黙と忍耐を約束したのであり、君もまたそれを受けいれたのですから。

この明るく敬虔な人たちの共同生活の美点は省かなくてはなりません。どうやってすべてを書くことができるでしょう！ 気持ちはよく二日が過ぎ、三日目がくると、私は次の道を考えるよう促されるのですから。

今日、私はフェーリクスとちょっとした諍いをしました。彼は私に、私が君に約束した大切な決心のひとつを破棄させようとしたのです。思いもよらぬうちに私のまわりに人が集まり、新しい荷を背負うことになり、結局、その重荷を引きずって運ばなければならなくなる。これが私の過ちであり、不幸であり、運命なのです。今、私の遍歴の途上では、第三者が永続的な道連れになることは許されません。私たちはふたりきりでいることを望み、そうでなければならないのです。しかし、ちょうど喜ばしからぬ新しい関係が結ばれようとしているようでした。

この数日来、フェーリクスと一緒に遊んで楽しんでいた家の子どもたちに、ひとりの小さく、元気な貧しい少年が仲間に加わりました。遊びにはつきものですが、彼は良きにつけ悪しきにつけ役に立つ子で、あっという間にフェーリクスのお気にいりとなりました。そしてさまざまな発言から、フェーリクスが次の旅程でも彼を遊び仲間に選んだことに気がついたのです。この少年はこのあたりではよく知られ、陽気な子だからどこでも大目に見られ、ときおり施しも受けています。しかし私は彼が気にいらず、この家の主人に彼を遠ざけるように頼みました。この願いは聞きとどけられましたが、フェーリクスはそれが不満で、ちょっとした喧嘩になったというわけです。

この機会に、私は嬉しい発見をしました。礼拝堂というか広間の隅に、石の入った箱が置かれていました。フェーリクスは山間を旅するようになって以来、鉱石に非常に関心をもつようになりました、夢中になってこの箱を取りだし、注意深く観察していました。そのなかに、目にとまるような美しいものが入っていたのです。主人は、欲しいものを選んでいいよ、この石は、ある旅人が少し前にここから発送した大量の石の残りものなんだよ、と言いました。主人がその旅人をモンターンと呼んだとき、私がこの名前を聞いてどれほど喜んだか、君には想像がつくでしょう。私たちがお世話になった大切な友人のひとりが、モンターンの名で旅をしているのです。いつごろのことだったのか詳しく尋ねたところ、旅の途中でまもなく彼に会えることが期待できそうです。

〔第4章終わり〕

今回の試訳について

今回訳出したものは、初稿全18章の最初の第1章から第4章である。これら4つの章は、2稿では第1巻の第1章から第3章の一部に改編されるが、内容的に大きな異同はない。主に加筆修正されているのは、注4, 6, 10に見られるとおり、いずれもフェーリクスの描写に関するものである。フェーリクスの成長物語という初期の構想が変容した痕跡の一部といえるが、この問題は今回訳出した部分だけで議論できるものではない。一方で、聖ヨゼフ二世が語る彼自身の人生物語は、初出の1810年版『婦人年鑑』から1829年の2稿まで、内容上の変更はまったく見られなかった。一部訳注と重複するが、以下、今回訳出部分の成立と公表史をまとめておく。

注9に示したとおり、ゲーテがこの素材に早くから関心をもっていたことは、1799年7月10日付けのマイヤー宛て書簡から確認することができる。フランクフルト版の解説では、この日付を狭義の意味での『遍歴時代』成立史のはじまりとし、「ゲーテは『修業時代』の続編を書くことを最終的に決意し、そのはじまりを頭に思い描いた」²⁵⁾と説明しているが、この時点で聖ヨゼフ二世の物語がすでに小説の冒頭部分として構想されていたと断定する根拠は見当たらない。フランクフルト版は、『修業時代』脱稿時から1799年ごろまでのものと推定される初期構想として、(1) ヤルノーの2通の手紙(テレーゼとフリードリヒ宛て)の草稿、(2) ナターリエに宛てて計画された手紙のシェーマ、(3) 小説のための初期シェーマを紹介しているが²⁶⁾、これらの計画にヨゼフ物語への関心と重なる要素はなく、『遍歴時代』とのかかわりを1807年5月17日の日記以前の資料に見いだすこともできなかった。

1807年は、『遍歴時代』の執筆が集中的に進められた年である。日記に

25) FA10, S. 781.

26) Ebd., S. 839f.

よれば、5月17日「『遍歴時代』第1章」（注2）、5月18日「『遍歴時代』第2章」（注9）、5月19日「第3章『訪問』」（注15）、5月20日「第4章『百合の茎』」（注20）、21日と22日には「新メルジーネ」も執筆している²⁷⁾。さらに「危険な賭け」（6月1日）²⁸⁾、「50歳の男」の一部（6月3日）²⁹⁾、「気のふれたさすらいの女」（8月5日）³⁰⁾もこの夏に作業されている。『私のその他の告白の補足としての年代記』*Tag- und Jahreshefte als Ergänzung meiner sonstigen Bekenntnisse*（1830年）の1807年の章（執筆は1817年、つまりまだ初稿は完成していない）にも、「小さめの物語がいくつも計画され、開始され、続けられ、完成し、この季節は実り豊かだった。これらは『遍歴時代』というタイトルのもと、一本の小説の糸でまとめられ、魅力的な全体を形成することになるだろう」³¹⁾と記されている。ただし奇妙なことに、ここで「小さめの物語」として具体的に挙げられているタイトルは「新メルジーネ」「50歳の男」「気のふれたさすらいの女」で、「聖ヨゼフ二世」は含まれていないのである。

その理由の手がかりは、翌年からはじまる、『遍歴時代』刊行前の一連の部分的公表のなかに見いだすことができるかもしれない。ゲーテは1821年に初稿を刊行する前に、コッタの『婦人年鑑』に小説の一部を少しずつ公表して、読者の反応をうかがっていた³²⁾。その最初の試みは1809

27) WA80, S. 211f.

28) Ebd., S. 218.

29) Ebd., S. 220.

30) Ebd., S. 253.

31) FA17, S. 204.

32) ブンツエルは、『婦人年鑑』に発表された物語がのちに『遍歴時代』に組みこまれたのではなく、最終的な小説刊行を見越した上で、ゲーテが戦略的に一部公表を繰りかえしていた成立事情の重要性を強調している。

Wolfgang Bunzel: „Das ist eine heillose Manier, dieses Fragmente-Auf-tischen“. Die Vorabdrucke einzelner Abschnitte aus Goethes „Wanderjahr-en“ in Cottas „Taschenbuch für Damen“. In: *Jahrbuch des Freien Deutsch-en Hochstifts* 1992, S. 36–68. 本稿では以下のサイトにWeb公開されたも

年版『婦人年鑑』（1808 年刊行）に公表されたフランス語からの翻案「気のふれたさすらいの女」であった。『遍歴時代』との関係はまだ伏せられていたが、この物語は好評を博し、すでに『遍歴時代』との関係を憶測する批評家もあった³³⁾。これを受けて、ゲーテは翌年の 1810 年版『婦人年鑑』（1809 年刊行）に「聖ヨゼフ二世」の物語を発表した。

このときの体裁は、他の物語の部分公表とは異なっている。まるで単行本のように独立したタイトルページ「ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代 第 1 卷」（当時、まだ副題「諦念の人々」はなかった）があり、そのあとに小説の一部として 4 つの章が続いているのである。刊行前の部分公表はさらに 1816 年版『婦人年鑑』に「くるみ色の少女」（1815 年刊行）、1817 年版に「新メルジーネ（前半）」（1816 年刊行）、1818 年版に「50 歳の男（前半）」（1817 年刊行）、1819 年版に「新メルジーネ（後半）」（1818 年刊行）と繰りかえされるが、小説『遍歴時代』の一部として公表されたのは「聖ヨゼフ二世」だけである。つまりこの物語は、他の物語のように単独でも読むことのできる「小説のなかのノヴェレ」のひとつではなく、当初から「小説の冒頭部分」として位置づけられていたことがわかる。

注 7 で紹介したとおり、『婦人年鑑』には、第 1 章の最後に置かれるナターリエに宛てたヴィルヘルムの最初の手紙はまだ存在せず、「オリジナルでは、ここでナターリエ宛て書簡が続く。これにより遍歴時代が導入され、修業時代へと結びつけられる」という注意書きが挿入されたことで、小説に果たすこの物語の機能は読者に向けても強調されていた。つまり『婦人年鑑』、初稿、2 稿を比べると、（1）『婦人年鑑』では、「小説の最初

のを利用した。

http://www.goethezeitportal.de/db/wiss/goethe/wanderjahre_bunzel.pdf#search=%27Wolfgang+bunzel+Goethezeitportal%27（最終閲覧 2018 年 8 月 6 日。）

33) Ebd., S. 2.

の4章」であることを強くアピールしつつ、小説全体にかかるるヴィルヘルムの手紙は省略し、単独の読み物としてのまとまりも確保されていた、(2) 初稿では、第1章の終わりと第4章の終わりにヴィルヘルムからナターリエに宛てた手紙が置かれ、「聖ヨゼフ二世」の物語とヴィルヘルムの世界は同じ地平のもとで語られている、(3) 2稿で初めて、「聖ヨゼフ二世」の物語は第2章として完全に切り離され、聞き手ヴィルヘルムによって再構成された物語、つまり「小説のなかのノヴェレ」のひとつという印象を強めることになったのである。

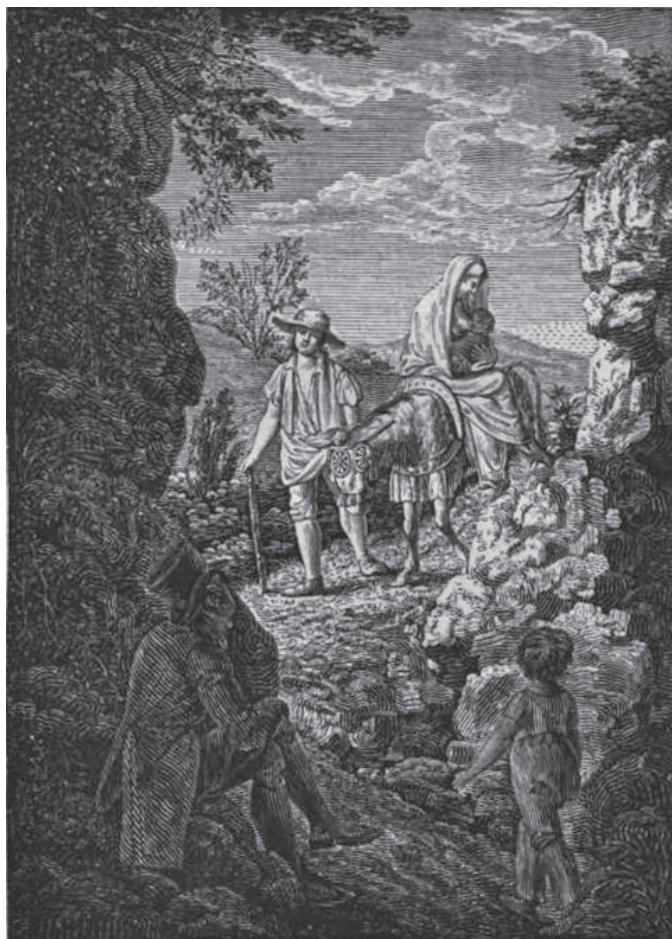
「聖ヨゼフ二世」も読者に好意的に受け入れられ、ゲーテは1810年秋の書籍市に合わせ『遍歴時代』第1巻を刊行する決心をした。その年の夏までは順調に準備を進めていたが、急に、不安を感じるようになった。1810年7月29日付けのコッタに宛てた手紙で、ゲーテは作品が仕上がる可能性をほのめかしつつ、風変わりな序文を挿入している³⁴⁾。ここでゲーテは、自分の作品をスカラ・サンタ（聖なる階段。敬虔な信者が膝をついて登る階段のわきには、ふたつの通常の階段がある）のあるローマのラテラーノ洗礼堂に見たてている。

一方には子どもたちや老人たち用のなだらかなスロープが装備され、もう一方には、性急な若者のための急勾配の階段がそびえ、そして真ん中には本来のちょうど良い寸法の聖なる階段があるので。少し怯えてそこから顔を背けてしまう人があるとしても、落ちついた人間を自負する人はみな、安心してこの階段を使うことをお勧めいたします。³⁵⁾

この序文でゲーテは、およそ10年後によく刊行される『遍歴時代』第1巻の多層的な作品構造を予告したのだろうか。この序文がその後採

34) FA33, S. 480f.

35) Ebd., S. 481.



フリードリヒ・ヴィルヘルム・グービッツの木版画³⁶⁾

用されることはなかった。執筆は中断し、すでに広告文を出していたコッタは、注5で紹介したように、グービッツの木版画でもって刊行を待つ読者に対応した。

36) *Taschenbuch für Damen auf das Jahr 1811*, S. 129.